TEN

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

Vol.47
FALL 2021

特集 新しい評価で悩んでいませんか?

01 新しい評価の全体像をつかむ 今井 裕之
03 「知識」だけを測らない 津久井 貴之
04 「目的や場面,状況」を設定した問題づくりを 臼倉 美里
05 伝える内容の「適切さ」を意識させる 工藤 洋路
06 学習過程を意識した指導と評価 酒井 英樹

SANSEIDO

新しい評価で悩んでいませんか?

新学習指導要領では, 小中高の全教科で評価の観点が
「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つに整理されました。
中学校外国語科においては, 何をどのように評価したらよいのでしょうか。
本特集では, 新しい評価の原則や実施方法, 3つの観点について, 先生がたに解説いただきます。

01　新しい評価の全体像をつかむ　今井 裕之
03　「知識」だけを測らない　津久井 貴之
04　「目的や場面, 状況」を設定した問題づくりを　臼倉 美里
05　伝える内容の「適切さ」を意識させる　工藤 洋路
06　学習過程を意識した指導と評価　酒井 英樹

新しい評価の全体像をつかむ

今井 裕之
（関西大学）

令和３年度も１学期が過ぎ，新学習指導要領に基づく授業とテストについて振り返る時期かと思う。授業については教材研究，授業展開の見直しを行いながら，新旧学習指導要領のギャップ（生徒の学力と教科書の内容のギャップ）を埋めることに注力されたのではないだろうか。テストについては，新しい評価の３観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に合うように，これまでの評価方法を手直ししたり，新たに開発したりと試行錯誤があったかもしれない。その試行錯誤から生まれた疑問点を踏まえて，以下ではQ&Aの形式で，新しい評価の原則と実施方法についてまとめてみたい。

Q1　旧学習指導要領の評価と何が違うの？

新学習指導要領の評価枠組みをまとめると以下のようになる。

領域	Reception 受容		Production 産出		
	聞くこと	読むこと	話すこと		書くこと
			やり取り	発表	
知識・技能	特徴や決まりを理解し, 内容を捉える		簡単な語句や文を（正確に）用いて表現する		
思考・判断・表現	目的や場面, 状況などに応じて情報, 概要, 要点を捉える		目的や場面, 状況などに応じて（適切に）内容を表現する		
主体的に学習に取り組む態度	・思考・判断・表現の活動に粘り強く取り組む ・見通しを立てる・振り返る・学習を自覚的に捉える（自己調整）				

旧課程との主な違いは, ①知識・理解と技能を一体化して「知識・技能」として評価する，②目的や場面，状況に応じた言語活動を通して「思考・判断・表現」を評価する，③「主体的に学習に取り組む態度」は，コミュニケーションを図ろうとする態度と，その学習過程において見通しを立て改善・工夫する自己調整を評価する，の３点である。

では，具体的にこれまでの定期テストなどでの評価とどのような点が異なるのか，上記の３点に沿って考えてみたい。

① 技能を通して知識を確認する問題が必要。（生きて働く知識・技能）

全ての技能領域に共通する知識を問う問題に加え，各技能領域で知識と技能が結びついていることを確認する問題も必要となる。

「知識」と「技能」を併せて評価するには，会話の文脈（場面・状況）を踏まえて，文法（例：現在進行形）を指定されなくても，それを含む文（We are playing basketball now.）を書く知識・技能があるかを問う必要がある。このような文脈に応じて言語使用できる「生きて働く知識・技能」を問う問題は，作問に手間がかかるしテスト用紙の幅を取るため，問題数は限られる。同僚と共同作業で作問すると少し楽になるかもしれない。

② 旧課程の「表現の能力」「理解の能力」よりも，「技能」と「思考・判断・表現」の違いを明確にして作問する。また，「話すこと」「書くこと」についてはパフォーマンス評価を実施する。

今回の学習指導要領の改訂で「目的や場面，状況」が「思考・判断・表現」を特徴づけるキーワードになった。「目的や場面，状況など」に合った言語使用の「適切さ」を評価することが，技能と思考・判断・表現を区別するうえで重要である。授業でもテストでも，「何のために」を生徒たちに意識させながら言語活動を行わせることが重要である。

③「主体的に学習に取り組む態度」は，「思考・判断・表現」と一体的に評価する。必要があれば生徒の「振り返り」を踏まえて，自己調整の成果を主体性の評価に加味する。

「主体的に学習に取り組む態度」を「思考・判断・表現」と一体的に評価することは，旧課程と比べて特に大きな違いだと感じられたのではないだろうか。「思考・判断・表現」を測る言語活動の成果が示せたということは，活動に粘り強く，自己調整しながら取り組めたと解釈することができる。

Q2 パフォーマンス評価は,「思考・判断・表現」の評価?

パフォーマンス評価は，原則的には言語活動の出来栄えを直接的に評価する方法であり，「思考・判断・表現」の評価と考えるのがまずはなによりの基本である。それと同時に，「知識・技能」が「生きて働く」かたちで学習されていることを確認できる大事な機会でもあり，パフォーマンス評価の際に「知識・技能」も評価することができる。例えば「話すこと」であれば，言語活動の内容面の適切さで「思考・判断・表現」を評価し，発音や文法など言語面の正確さで「知識・技能」を評価する。その際，ターゲット文法を使わずに評価タスクが完遂できている場合に，マイナス評価をしないように注意が必要だ。

パフォーマンス評価の際には「主体的に学習に取り組む態度」の評価も行うため，3観点全ての評価ができるテスト方法である。

Q3 主体性と「思考・判断・表現」は本当に連動させるの?

「関心・意欲・態度」では，ノート提出や発表回数など，前向きで積極的な学習態度面で評価を行っていた向きもあるが，「主体的に学習に取り組む態度」は，外国語によるコミュニケーションとその学習に必要な「自己調整」などをしながら「粘り強く」取り組むことであり，必ずしも「積極的（元気）であること」を意味しない。そのため「思考・判断・表現」にあたる言語活動に最後までしっかりと取り組むことを「粘り強さ」「自己調整」の成果と捉えて「思考・判断・表現」の評価と連動させる。

とはいえ，「自己調整」をしっかりしながら「粘り強く」取り組んだにもかかわらず，言語活動での成果が伴わない場合もあることを鑑みて，振り返りシート等に記述させることで生徒の活動への取り組み方を確認し，その様子が普段の授業からもうかがえるようなら，「思考・判断・表現」がc評価（成果がでなかった）でも，「主体的に学習に取り組む態度」についてはcではなくbとすることができる。

「知識・技能」と「主体的に学習に取り組む態度」は関連づけなくてもよいのか，という疑問もあるかもしれない。「自己調整」しながら「粘り強く」取り組む対象は，英語学習活動全体であるはずなので，「思考・判断・表現」と連動させるからといって「知識・技能」の獲得で「主体的に学習に取り組む態度」を評価しないというわけではない。「知識・技能」を駆使して，コミュニケーション活動を行いながら人間性を育むことを学力の総体と捉えるならば，コミュニケーション活動（＝思考・判断・表現）への粘り強さと自己調整を評価することは，「知識・技能」の学習活動も同時に評価しているとみなすことができると考えられる。

Q4 3観点×5領域をどのように総括するの?

3観点×5領域=15の評価枠をどのような方法で総括するのかは，「実情を踏まえて各学校において定める」とされている。すでに各学校で確定しているとは思われるが，今後さらに検討する際には，以下の2点を確認しておきたい。

① 評価の軸は「内容のまとまり（＝5領域）」ではなく「3観点」である。

15枠が毎学期確実に埋まらない状況は起こるだろう。「知識・技能と思考・判断・表現の問題を5領域別々に作る」となると，教師も，テストを受ける生徒も大変である。その際に「今学期は思考・判断・表現の評価がほとんどなかった」と「今学期は『書くこと』の評価が十分できなかった」のどちらが深刻な問題かと言えば前者である。『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』（国立教育政策研究所，2020）に，「学期単位で総括する際は，全ての評価情報を得ることができない場合が考えられるが，学年末で全5領域の情報が得られていることが必要となる，またその学期ごとの重点指導領域の結果を重視することも考えられる」と述べられている。つまり，5領域については学期ごとの学習内容を反映させる可能性が提案されているが，3観点については毎学期全観点ごとに総括することが前提である。

② 3観点の評価割合は，原則的には1:1:1とする。

3観点の評価割合と総括のしかたは，原則的には同じ割合とするのが単純ではあるが妥当であると考えられる。①でも述べたように，5領域は学期ごとに評価資料が揃っていないこともあり得るし，学期ごとの重点指導領域の結果を重視することを可能とするなど，比較的柔軟に評価できるのに対し，3観点は評価の基本軸であり割合変更には言及されていない。

とはいえ3観点の配点割合についてはこれまでも先生がたから質問を受けているので，議論の余地はあるのかもしれない。例えば「学年や学期ごとの学習内容の差異を，3観点の評価割合にも反映させるべき」，あるいは「主体性と思考・判断・表現を一体的に評価することによって，評価機会ごとの配点が偏るのを避けるべき」といった意見もあるかもしれない。いずれの場合も，学校で評価方法を統一する際にそれを支持する十分な根拠があるか，方法が煩雑になりすぎて運用に問題が生じないかを十分確認しておきたい。

■終わりに

本稿で強調したい点は，①これまでの筆記テストでも，「知識・技能」，「思考・判断・表現」の条件を満たすものはどんどん活用しよう，②3観点の評価資料の収集を重視しよう，③パフォーマンステストは3観点全てを評価できる方法として積極的に活用しよう，の3点である。あわせて，各観点・領域の評価の具体事例を読んでいただくことで，評価の全体像について同僚間で理解の共有を図っていただけたら幸いである。

【参考文献（pp.01～06）】
国立教育政策研究所（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』

知識・技能

「知識」だけを測らない

津久井 貴之
（大妻中学高等学校）

1 外国語科（英語）における「知識・技能」とは

まず，「外国語科（英語）における『知識・技能』」（以下，「知識・技能」）が何を指すのかを確認しておきたい。

「知識・技能」のうち，「知識」とは，学習指導要領の「英語の特徴やきまりに関する事項」のことで，「音声」や「符号」，「語，連語及び慣用表現」，「文，文構造及び文法事項」を指す。一方「技能」とは，「聞くこと」や「読むこと」では，実際のコミュニケーションにおいて聞いたり読んだりしてその内容を捉える能力のことである。また，「話すこと［発表］［やり取り］」や「書くこと」では，実際のコミュニケーションにおいて話したり書いたりして表現したり伝え合ったりする能力である。「知識」と「技能」を対照的にみると，「技能」は，

① 実際のコミュニケーションにおいて何ができるかが問われる

② 知識が正しく自動化されることで発揮される

と言うことができる。

2 「知識・技能」の評価のポイント

「知識・技能」を測りたいのであれば，ある特定の言語材料を用いてコミュニケーションを行う必要がある場面や文脈を設定したテストを作る必要がある。「思考・判断・表現」では，「コミュニケーションを行う目的や場面，状況に応じているか」，つまり，目的を達成するための条件を守れているか，目的を達成するための表現内容や形式の選択がなされているか，などの「適切さ」を評価するのに対して，「知識・技能」の観点では言語使用の「正確さ」を評価することになる。

また，従来の評価（知識・理解に偏りがちな評価）との違いに焦点を当てて，「技能」を評価する際のポイントを整理すると，評価タスクやテストづくりには前項の②が重要であると考える。「知識が正しく自動化されているか」を測るということは，例えば，「書くこと」の「技能」では「使用する言語材料の提示や指定がなくても，それらを用いて事実や自分の考えなどを書くことができるか」が問われる。したがって，「to不定詞を使ってあなたの将来の夢を書きなさい」という問題では「技能」を評価したことにはならない。to不定詞を使う必然性や必要性が文脈から伝わるような場面や問題設定が必要である。例えば，「対話の流れに合うように下線部に英語を一文書きなさい」として右上のような問題を作成することが考えられるだろう。

「技能」の評価が求められるということは，指導する際に「to+動詞の原形で，…することという意味になる」という形式(form)と意味(meaning)だけを指導するのではなく，どのような場面でどんな働きをするかという機能(function)を重視し，場面を意識した導入や文脈の中での理解や練習が重要であるということも示している。

> You and your friend, Mika, listened to a speech at City Hall yesterday. You are talking about it.
> Mika: The speech was interesting. I understand having a dream is important.
> You : Yes, but I don't know my dream yet. How about you?
> Mika: _____.
> I will help many sick people in hospitals.
> You : What a nice dream! I think you can do it.

「聞くこと（読むこと）」の技能では「実際のコミュニケーションにおいて，日常的な話題や社会的な話題についてはっきりと話された（書かれた短い）文章等を聞いて（読んで），その内容を捉える技能が身に付いているか」を評価する。例えば，be going to …などを含む英文を聞いて来週の予定を聞き取れたかを問う問題や，比較級などを含む英文を複数聞いてグラフの内容を正しく説明しているものを選ぶ問題などが考えられるだろう。また，「読むこと」では，受け身形などを含む英文を読んで海外の文化や年中行事について表にまとめるなどの問題が考えられるだろう。いずれも，特定の言語材料が聞き取りや読み取りのポイントとなるような問題を設定するように気を付けたい。

なお，「知識・技能」と「思考・判断・表現」の2つの観点を1つの言語活動や評価タスクの中で評価することも可能である。「目的や場面，状況」の設定は「思考・判断・表現」を測るうえで欠かせないものであり，言語材料の機能や利便性に着目して，どの言語材料が自然に使われる場面なのかを見極めて「知識・技能」を評価したい。

3 指導と評価をつなげよう

指導と評価の一体化が叫ばれて久しい。身に付けさせたい力や能力と授業中に行っている言語活動，そして定期テストを中心とした評価につながりがあるだろうか。学校現場では，評価（評定）は現実的に迫られてすでに実施していることであるが，普段指導していないことや授業で身に付けさせてこなかった技能などをテストしているなどということはないだろうか。指導と評価の一体化は生徒の学習意欲の伸長・減退や「外国語（英語）」の教科観にまで大きな影響を及ぼす重大な課題であり，校内外での実践を共有して評価の妥当性や信頼性を高めていくことが求められる。「知識」に偏重したテストや評価方法にならないように留意し，生徒が英語を用いてできることが増えたと実感できるテストづくり，授業づくりに努めていきたい。

思考・判断・表現（聞くこと・読むこと）

「目的や場面，状況」を設定した問題づくりを

臼倉 美里
（東京学芸大学）

1 新しいようで新しくない？

学習指導要領が新しくなるたびに，何かしら「新たな用語」が生まれる。あるいは，「ちょっとだけ表現が変わったり」する。このような変化に対して私たちは「新しいものがでてきた」と受け止めがちだが，まず述べておきたいのは，新学習指導要領の3観点は，旧4観点と比較したとき，決して「新物・別物」ではないということである。「英語を使ってコミュニケーションできる生徒を育てる」という目標自体は変わっていないのだから，教師はこれまでと同様に（あるいはこれまで以上に）生徒の力を伸ばすために「地に足をつけた授業実践」を追求していくことが責務である。

2 「聞くこと・読むこと」の評価

本紙p.1の表を見ると，「思考・判断・表現」（以下，「思判表」）と他の2つの観点は，相互に関連していることがわかる。ここで注意すべきことは，これら3つの観点で評価しようとする内容はそれぞれ独立して生徒の頭の中に存在しているわけではないということである。知識・技能がなければ思考・判断・表現はできないわけだから，必ずしもこの2つを切り離して個別のテストで評価する必要はない。

なお，「知識・技能」についても同様で，知識がなければ技能を発揮することはできないので，例えば，生徒に英語の文章を読ませて何が書かれているかを読み取ることができれば，知識・技能の両方が備わっていると捉えて良い。なお，評価の焦点はあくまでも「生徒が英語を使って何ができるか」であって，「to不定詞の3用法を言えるか」とか「受動態はbe動詞＋過去分詞で作る」などのように文法のルールを説明できるかではない。

3 「思判表（聞くこと・読むこと）」の具体例

「思判表（聞くこと・読むこと）」を評価するために生徒に聞かせたり読ませたりする際には，目的や場面，状況を設定することが大切である。具体的には以下の3つが挙げられる。

(a) 情報収集のため（思判表ポイント：情報の取捨選択）

(b) 概要把握のため（思判表ポイント：情報の整理）

(c) 表現のため（思判表ポイント：批判的理解，自分はどう思うか）

例えば*03NC* 2年 Lesson 5 “Things to Do in Japan” を使って授業中あるいは考査などで「思判表」を意識した読みを促すとしたら，教科書と同じ設定（歓迎会を企画する）で，教科書本文の内容を，文章の形式を変えて（モノローグ⇔ダイアローグ）書き換えたものを読ませたり，「韓国から来る高校生のための歓迎会を企画する」という新たな設定で，教科書本文の形式は変えずに内容を書き換えた文章を読ませ概要や要点を把握させたりするといったタスクが考えられる。さらに発展させたければ，「あなたは近くアメリカから来日する友だちのために京都の主要観光名所を1日でめぐるツアーの計画を立てようとしています。外国人観光客向けのウェブサイトに書かれた口コミを読んで，おすすめの観光スポットと順路の情報を読み取りましょう。」といった活動なども考えられる。

ペーパーテスト等で出題する際には，和問和答，英問英答，正誤判断，サマリーなど様々な形式が考えられるが，留意すべきは形式ではなく，読んだり聞いたりした内容の中から，目的や場面，状況に応じて必要な情報を取捨選択したり整理したりするような設問になっているかということである。例えば，前述した*03NC* 2年のLesson 5の場合，テスト問題として登場人物の二人が「韓国から来日する観光客の間で人気がある活動ランキング」について書かれたウェブサイトを見て対話している文章を読ませ（聞かせ）て，「韓国から来る高校生の歓迎会の企画に盛り込むべき活動」を選ばせるというような設問を作る。回答形式は自由記述形式でも，あらかじめ用意された選択肢の中から適切なものを選ばせる形式でも，読み取った情報を表などにまとめさせる形式でも良い。また，文章中では登場人物たちが歓迎会の企画に盛り込む活動を一つだけ提案していて，それを読み取った（聞き取った）上で，生徒自身にもう一つの活動を選んで回答させるといった工夫も考えられる。生徒は「歓迎会で実現可能な活動」「高校生向けの活動」という視点から，情報を取捨選択して回答することになる。

4 絶対に忘れてはいけないこと

（1）学習評価の基本は「観察」である

「正しく生徒を評価できるか自信がない」という先生は，授業中にどんどん生徒に英語を聞かせたり読ませたり（書かせたり話させたり）して，その様子を日々観察し続けてみると良い。そのうち個々の生徒の成長が容易に見取れるようになる。

（2）学習評価は教師と生徒の信頼関係の上に成り立つ

生徒が英語を聞いたり，読んだり，話したり，書いたりする様子を常に見ている教師が主観を交えて評価すれば，生徒も保護者も納得する。普段は生徒に英語をあまり使わせていないのに，テストのときだけ英語で話させる先生がいるとしたら，生徒は「この先生，ちゃんと自分を見てくれているのかな？」と不安に思って当然である。

評価者としてのスキルアップのためにも，生徒に英語を使わせよう。

思考・判断・表現（話すこと・書くこと）

伝える内容の「適切さ」を意識させる

工藤 洋路
（玉川大学）

1 「知識・技能」と「思考・判断・表現」の違い

次の問題は，『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』（以下，『参考資料』）で例示されている問題であるが，「知識・技能」と「思考・判断・表現」のどちらを測っているだろうか。

> 以下は，AとBのSNS上でのやり取りです。対話の流れに合うように，（　）内の語を適切な形に変えたり，不足している語を補ったりして，会話が成り立つように英語を完成させなさい。
> A: Where are you now?
> B: I am at ABC park with Ken.
> A: What are you and Ken doing?
> B: (play) basketball now. Come and join us!

この問題は，「知識・技能」のうちの「技能」を測る問題である。『参考資料』では「知識」と「技能」を区別しており，「知識」では，学習指導要領の「英語の特徴やきまりに関する事項」を理解しているかどうかを評価するとしている。つまり，話すこと［発表］の評価であっても，「知識」の評価では，言語材料等を理解しているかどうかを測るということである。「技能」については，上記の問題のように，必ずしも実際のコミュニケーションを行うことが前提となっているわけではなく，技能（ここでは書くこと）の中で，自らで使うべき言語材料（ここでは現在進行形）を判断した上で，それを正確に使えるかどうかを測るということである。

では，次の問題はどうだろうか（同じく，『参考資料』から抜粋）。

> あなたは，来月訪れる予定の留学生のために自分が所属しているサッカー部を紹介する記事を書くことになりました。次の情報カードのすべての内容と写真を用いて，記事に掲載する原稿を書きなさい。
> 【情報カード】

部活動	サッカー部がある
活動状況	毎日練習している

（表一部，写真省略）

この問題は「目的や場面，状況」が設定されていることから，「思考・判断・表現」の問題だと思われるかもしれないが，書くべき内容がすべて与えられているため，結局は，英語の正確さの面を測定する「技能」の問題である。簡潔に言えば，「知識・技能」は英語の使用の「正確さ」を測る観点であり，「思考・判断・表現」は表現する内容の「適切さ」を測る観点である。

2 「思考・判断・表現」を測るには

「思考・判断・表現」を評価するための言語活動やテスト問題の条件として，以下の3つが挙げられる。

- ●実際に，意味のやり取りがあるコミュニケーションを行う。
- ●コミュニケーションの「目的や場面，状況」が設定されている。
- ●設定された「目的や場面，状況」から，どのような内容を表現することが適切か判断できる。

このことを踏まえて，「思考・判断・表現」に関わる話すこと・書くことの言語活動を考えてみる。取り上げる活動は，年度初めによく行われる「自己紹介」とする。単に「ペアで自己紹介をしてみよう」という指示だと，コミュニケーションの「目的や場面，状況」の設定が弱い。なぜなら，生徒が，I like eating ice cream. My favorite ice cream shop is near the station. It's ten minutes from our school. You should eat ice cream there.と表現した場合，この内容が適切かどうかを判断できないからである。「目的や場面，状況」があれば，内容の適切さの判断が可能になる。新しく学校に来たALTの先生を想定した自己紹介であれば，相手にとって学校の周辺の情報を知ることは生活をする上で大切なので，上記の内容は適切である。一方で，海外の留学先のクラスメイトに上記の内容を伝えたとしても，相手にとっては，遠い日本の，しかも，限られた地域の非常に小さな情報であるため，興味を示されない，言い換えれば，場違いだと思われる情報になる。このように，聞き手や読み手などの設定が架空のものであっても，「目的や場面，状況」を生徒が理解した上で，どのような内容を伝えるのが適切かを考えさせることが，「思考・判断・表現」の評価では必須となる。

同じ言語活動やテスト問題で，「知識・技能」と「思考・判断・表現」の両方の観点を同時に測定することは可能である。ただ，どのような内容を伝えるべきかを考えることにエネルギーを費やすことで，正確性への意識が弱くなることがある。前項で紹介したような「技能」を測定する問題では正確に英語を使えたが，内容の適切さと同時に正確性も測る問題では，正確性が低くなる可能性がある。したがって，ペーパーテストでは，「技能」を単独で測定する問題も出題しながら，生徒の学習の成果や達成度を可能な限り詳細に測定することで，次の学習や指導への示唆を得ることを試みたい。

■終わりに

「思考・判断・表現」を評価するためには，指導を通して「思考力，判断力，表現力等」が育成されていることが前提であるということを再確認したい。直接には評価対象にならない言語活動においても，「目的や場面，状況」を設定するなどして，指導と評価の一体化を目指したい。

主体的に学習に取り組む態度

学習過程を意識した指導と評価

酒井 英樹
（信州大学）

中学校では，新しい学習指導要領下での初めての評価を終え，テスト・パフォーマンス課題などについて戸惑いの声も聞こえる。本稿では，「主体的に学習に取り組む態度」の評価について耳にする質問についてどのように考えたらよいかを述べる。

1 旧「関心・意欲・態度」と何が違うのか

旧観点「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」は，「コミュニケーションに関心をもち，積極的に言語活動を行い，コミュニケーションを図ろうとする」姿が評価の対象で，「言語活動への取組」と「コミュニケーションの継続」という点に着目してきた。新観点「主体的に学習に取り組む態度」では，「積極的」ではなく，「主体的」という用語が用いられ，「言語活動に粘り強く取り組む態度」に加え，「自らの学びを自覚的に捉えている状況」を評価することになった。

「自らの学びを自覚的に捉えている状況」を評価するためには，学習過程を意識して指導することが重要だ。外国語教育においては，「①設定されたコミュニケーションの目的や場面，状況等を理解する，②目的に応じて情報や意見などを発信するまでの方向性を決定し，コミュニケーションの見通しを立てる，③目的達成のため，具体的なコミュニケーションを行う，④言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行う」（中学校学習指導要領解説，p. 13）という学習過程が提案されている。この過程の中で，言語活動に取り組んでいるだけでなく，目的意識をもったり，学びの方向性を決めたり見通しをもったり，自らの学びを振り返り，良かったところは次に活かそうとしたり，うまくいかなかった点は改善しようとしたりする態度を評価することになる。

2 主体性の評価の割合は他と同じか

今回の改訂により，育成するべき資質・能力が3つの柱で整理された。「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」は，それぞれ学力を構成するものであり，それぞれが重要であるとされている。このことを考えると，評価の3観点に基づく学習状況の評価を総括して評定としてまとめる際にも，「1：1：1」の割合にすることが基本である。

旧観点では，「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語理解の能力」「外国語表現の能力」「言語や文化についての知識・理解」の4観点がそれぞれ25%とされ，全体の半分を占める「外国語理解の能力」と「外国語表現の能力」が重視されていた。また，「関心・意欲・態度」の割合が25%であったものから，新しい枠組の「主体的に学習に取り組む態度」が33%を担うことになるので，主体性を重視しすぎているのではないかという声も理解できる。しかし，「主体的に学習に取り組む態度」で評価すべき生徒の姿は，ただ単に言語活動に取り組んでいる様子だけでないことを考えると，あながち不適切な割合だとは言えない。

なお，評定の適切な決定方法は各学校が決めることとされているので，学校なりの理由や考えが明確にあれば，ある観点にウェイトを置いて評価することに問題はない。

3 がんばる生徒の「がんばり」を評価してよいか

主体性の評価は，学習過程における取組の状況を重視するため，がんばる生徒の「がんばり」を肯定的に捉えようとしている。一方で，「やる気はないけど，いわゆる学力の高い生徒が高く評価されるのではないか」という意見も耳にする。しかし，単元全体の学びの進め方も参考に評価するのであれば，「主体的に学習に取り組む態度」において，そのような生徒の評価が高くなることはないだろう。

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』の事例1に，話すこと［やり取り］のパフォーマンス評価の例がある。この中で，「思考・判断・表現」がa基準である生徒は「主体的に学習に取り組む態度」がa基準であると示されている。この「思考・判断・表現」の評価の対象は，当該単元で指導した，「引用する，考えを理由とともに述べる，会話を継続する」といった側面である。英語の知識はあるがやる気のない生徒が，普段の言語活動にきちんと取り組んでいなければ，単元末に，「思考・判断・表現」の観点から高く評価されるパフォーマンスはできるようにはならないだろう。つまり，日々の授業の中で言語活動に取り組んできたからこそ，パフォーマンス評価でその力を発揮できるという考え方である。

ただし，普段の授業の言語活動にしっかりと取り組んできたにもかかわらず，パフォーマンス評価において「思考・判断・表現」の点が不十分な場合がある（c基準）。そのような場合には，自らの学びを把握しながら取り組んできたかどうか（自己調整）の点を加味して，「主体的に学習に取り組む態度」を評価することになる。

4 振り返りについて

生徒がどのように自らの学びを自覚的に捉えているかということを把握するには，何らかの記述をしてもらう必要がある。数名ならば，授業中に指名して発言させることも可能だが，記録のための評価を行うとなると，全員に関する情報が必要となる。その意味で，振り返りシートなどに記述をする方法を活用すべきである。ただし，毎時行うのが効果的かどうかは検討の余地があるだろう。

ご案内

ことまな学校サポートサイト

Kotomana

https://www.sanseido.jp/support/

『ことまな学校サポートサイト』は，指導書・デジタル教科書（教材）等をご採用いただいている学校ごとの専用サイトです。（ログインには ID と パスワード が必要です）
指導書などに付属する各種データにくわえ，追加の資料やワークシートなどのデータをダウンロードいただけるほか，デジタル教科書などの導入の方法の確認や，お問い合わせフォームもご利用いただけます。

指導書付属データのご利用には，教師用指導書の購入が必要です。お申し込みの詳細は，教師用指導書収録のDVD-ROMをご覧ください。

＼ログインしたら，簡単操作で最新の教材データをダウンロード！／

随時更新中！

画面はイメージです。変更になる可能性があります。

「ことまな」は三省堂のデジタル教科書・教材・辞書を提供する新しいプラットホームです。

ことまな学校サポートサイト

三省堂 教科書・教材サイト　https://tb.sanseido.co.jp/

三省堂　〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14　TEL 03（3230）9411（編集）・9412（営業）

TEN TEACHING ENGLISH NOW Vol.47
2021年9月10日発行
○編集・発行人：瀧本多加志
○発行所：株式会社 三省堂　○印刷所：三省堂印刷株式会社